

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 7 年 6 月 12 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2022～2024

課題番号：22K11635

研究課題名（和文）「体育嫌い」の沈黙する声に注目した体育カリキュラムの探究

研究課題名（英文）Exploring the physical education curriculum focusing on the silent voices of those who "dislike physical education"

研究代表者

井谷 恵子 (Itani, Keiko)

京都教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：80291433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：クイア・ペダゴジーや身体・健康リテラシー、及び先行的な実践について調査を行い、新たな体育カリキュラムについて多角的な示唆を得た。また、「体育嫌い」に関心を持つ体育・スポーツ指導者や志望する学生へのフォーカスグループ・インタビューと、セクシュアルマイノリティの支援者へのインタビューを通じて、「体育嫌い」の人々の原因や改善策について検討を行った。研究成果は、研究発表や論文とともに、社会還元に注力し、「LGBTQ+支援の専門家が語る学校体育の現場と未来」などのパンフレットの作成・配布、および『どうして「体育嫌い」なんだろう—ジェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内での体育科教育やスポーツ参加に関する研究においては、沈黙し不可視化された「体育嫌い」の経験や声に関する研究は僅少であり、運動好きでより高い運動能力や体力を目指すという規範に沿った改善策や処方に視点が向けられてきた。多様性や共生を強調する教育やスポーツ界にあっても、「理想的な」身体や動き、社会関係に対する「公的な知」は強固であり、それゆえ規範に沿わない人々の声はかき消されてきた。一方、本研究者らによるこれまでの研究では、「体育嫌い」は創造的な視点を持つ存在としての価値を見出していることから、本研究の基本的問いは、「体育嫌い」の研究を通じて新たな体育科教育の展望を見出すことにある。

研究成果の概要（英文）： We conducted research on queer pedagogy, physical and health literacy, and innovative practices, and obtained various suggestions for a new physical education curriculum. We also conducted focus group interviews with physical education and sports instructors as well as with aspiring students interested in the topic of "dislike of physical education". Additionally, we interviewed support experts of sexual minorities to explore the reasons behind people's dislike of physical education and to identify ways to improve the situation.

In addition to research presentations and papers, we have focused on giving back to society. This includes creating and distributing pamphlets such as "LGBTQ+ Support Experts Discuss the Current State and Future of School Physical Education," and publishing a book, "Why Do People Dislike Physical Education? - The Future of Physical Education Illuminated by the Perspective of Gender and Sexuality".

研究分野：保健体育科教育学、スポーツとジェンダー研究

キーワード：体育カリキュラム ジェンダー セクシュアリティ 体育嫌い フォーカス・グループ・インタビュー

1. 研究開始当初の背景

教育をはじめ、社会のあらゆるところで「多様性」「包摂」ということばが溢れるが、その理解や実践は、マジョリティである属性を持った人々がマイノリティを理解し、包摂しようとするマジョリティ中心の発想になりがちで、マジョリティに圧倒的な権力があることが知られるようになってきている（グッドマン、2017）。多様性の尊重とは、インターセクショナルリティの観点から、性別や人種、障害のあるなしなど個人を形成する様々な属性を捉えるだけでなく、性別であっても単純に二分できない差異があることを認め、対等な存在を認めることであり、黒人女性や障がいのあるセクシュアル・マイノリティのように幾重にも周縁化され排除される属性を持つ存在に目を向けることである。

本研究者がこれまで進めてきた研究では、競争や他者の視線にさらされ、「ボールこないで」と願うような学習者の存在が明らかになった。ゲーム性を楽しみ、ハイパフォーマンスを競うことに喜びを見出す生徒の存在やその価値がクローズアップされ、「公的な知」として認識される反面、「体育嫌い」の姿や声は不可視化されている。また、性別二元制、異性愛が「公的な知」とされる学校文化やスポーツ制度では、規範的セクシュアリティに合わない生徒の存在が潜在化するだけでなく、息苦しさや生きづらささえもたらしていることが見出された。

それまで「運動のできない自分が悪い」と沈黙し、不可視化されてきた声には、制度化されたカリキュラムとは裏腹に、実践され経験されるカリキュラムにおいては、体育の学びが保証されず、格差が拡大している状況が見て取れる。また、体育で教え学びとすることは何かという体育の目的が問われ、競争的なスポーツ中心のカリキュラムに疑義が投げかけられてもいる。さらに、性的マイノリティを含め「体育嫌い」の人々は、それまでのネガティブな経験を他者と共有し、対話をする中で、体育の意味を問い、自分の経験とつなぎ合わせ、運動やスポーツとの向き合い方を見直すきっかけを得ていることも示唆された。

この意味で、「体育嫌い」とは、体育の公的な知に沿わず、無為化された存在である一方、創造的な視点を持つ存在としてとらえることができる。権力を持つマジョリティの立場にある指導者や研究者などが「体育嫌い」の沈黙する声に耳を傾けることによって、新たな体育科教育のあり方が見えるのではないかというのが本研究の基本的立ち位置である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、批判的教育研究の立場から権力的マイノリティとしての「体育嫌い」の声に注目し、新たな体育カリキュラムへの示唆を得ることであった。具体的には、(1) クイア・ペダゴジーや身体・健康リテラシー、及び先行的な実践について調査を行うとともに、(2) 体育指導者や体育教員を志望する学生、LGBTQ+（注1）支援の専門家を対象としたインタビューを通して、体育の問題点を明らかにし、(3) 新たな体育カリキュラムの具体像を総合的に検討した。

3. 研究の方法

(1) クイア・ペダゴジーや身体・健康リテラシー、及び先行的な実践についての調査

- ① 身体リテラシーに関する文献調査
- ② 国内のオルタナティブな実践に関するインタビュー調査
- ③ 海外のクイア・ペダゴジーに関する先進的な実践

(2) 体育指導者や体育教員を志望する学生、LGBTQ+支援の専門家を対象としたインタビュー調査

- ① 「体育嫌い」に関心を持つ体育指導者や体育教員を志望する学生を対象に、フォーカスグループ・インタビュー（以下、FGIと表記）を行い、分析した。
- ② LGBTQ+支援の専門家を対象としたインタビュー調査を行い分析した。

*データ分析にはQualitative Data Analysisソフトウェアを用いて、分析精度を高めた。

(3) (1)(2)の結果を踏まえ、体育カリキュラムの問題性や新たな体育カリキュラムの具体像についての総合的な検討

4. 研究成果

(1) クイア・ペダゴジーや身体・健康リテラシー、及び先行的な実践についての調査結果

- ① 身体リテラシーに関する文献調査

身体リテラシーについて、Whitehead（2001）によって示された概念を検討し、現在の体育・スポーツ科学において、身体の尺度化の道具として用いられ始めていることの問題性を明らかにした。

Whiteheadは、すべての人の身体活動の価値を擁護するために、実存主義、現象学、一元論という哲学的基盤の上に、身体リテラシーという概念を提示し、生涯にわたる身体活動への参加を尊重し、それに責任を持つためのモチベーション、自信、身体能力、知識および理解と説明している。この身体リテラシー概念の実践的な意義は、沈黙を強いられるマイノリティの声を聴き取る努力を促す点にある。このように、Whiteheadのいう身体リテラシーは、他者と優劣を競い合うために用いられる概念ではないにも関わらず、日本では主に競技者の身体能力の尺度として歪曲化されているところに重大な問題が認められる。

② 国内のオルタナティブな実践に関するインタビュー調査
誰ひとり置き去りにしない体育やスポーツの場づくりに示唆を与えると考えられる実践やそれらを方向づける理論について、代表的な実践者、研究者を調査対象とした。「未来の体育を構想するプロジェクト」「飛騨シュレ」「男女ミックスのフラッグフットボール大会 G-FLAG」「包括性教育」に関して、計7名の研究者・実践家から理念や実践の内容を聞き取った。このうち「飛騨シュレ」の実践については、地域スポーツクラブの新たな方向性を示すものと捉え、継続的な調査とともに、紹介用のリーフレット「飛騨シュレってなに？」(2023)、および冊子「今、飛騨シュレ ええ感じやねん〜今までもこれからも〜」(2025)を作成した。

③ 海外のクイア・ペダゴジーに関する先進的な実践
カナダのトロント大学と米国ポートランド市のコミュニティ・サッカークラブの実践について調査を行った。スポーツ場面においては、プログラム内容とともに、バリアフリーの施設や更衣室やトイレ、服装などに性や文化の多様性への配慮があるかどうか重要な要素である。トロント大学では、一人でもグループでも利用できる「ファミリー更衣室」や、車椅子で利用できるプールリフトなどが整備されている。「トランス・プール・アワーズ」「IMPACT PROUD」などのプログラムは地域の人々にも開放され、社会的な啓発活動としての価値も高い。ポートランド市のコミュニティ・サッカークラブは、性的指向や性自認だけでなく、経済状況や移民ステータス、言語などによりスポーツへのアクセスが制限されやすい人々に視点を当てた取り組みを行なっている。例えば、「男子チーム」の定義を「一人でも男子が含まれているチーム」とし、トランスジェンダーやノンバイナリー選手など、性別にこだわらないチーム編成を用いている。

(2) 体育指導者や体育教員を志望する学生、LGBTQ+支援の専門家を対象としたインタビュー調査

① 「体育嫌い」に関心を持つ体育指導者や体育教員を志望する学生を対象とした FGI
体育教員志望の学生9名、及び保健体育教員9名(小学校含む)をそれぞれ2グループ、計4グループの FGI を実施した。「体育嫌い」や「嫌な経験」の原因、どうすれば、「体育嫌い」をなくす、あるいは少なくすることができるか、について、グループ内で自由な意見交換を行った。主な結果として、教員養成段階の学生たちは、自身も嫌な経験をしているが、どう対応すれば良いかわからない状況にあり、教育実習などを通じて、一層対応の難しさを感じている。一方で、学生たちは、提示した資料を通して他者の経験への理解を深め、対処する必要性を感じている。教員は「体育嫌い」を生み出さない授業をしたいと考えているが、「体育嫌い」の根底にあるジェンダーやセクシュアリティの課題に向き合う機会が不足している。学生も教員も、教育実践の場が多忙のために、潜在化している問題に目を向け対処する余裕がないと捉えている。課題として、LGBTQ+の多様性にだけ注目することによって、その存在や出来事が特別なインシデントのように扱われる懸念があり、インターセクショナルリティの概念やマジョリティ側の多様性にも目を向ける必要があると考えられる。

② LGBTQ+支援の専門家を対象としたインタビュー
体育・スポーツにおける LGBTQ+への対応としては、教育行政(文部科学省)やスポーツ関連組織(日本スポーツ協会、プライドハウス東京)などによってガイドブックや指針が公表されているが、一般的な指針やスポーツ場面を対象にしたものが大半であり、多くが量的調査の結果などからの提示となっている。一方で、LGBTQ+当事者のリアルな声を聞き取ることやそれらを公表することの限界も存在する。そこで、本研究では、誰もが通らなければならない学校体育に焦点化し、LGBTQ+の人々への支援活動や研究に最前線で携わっている9名の専門家から協力を得た。これらの結果については、体育・スポーツ指導の実践の場における対応の改善が急務となっていることから、取りまとめた内容をブックレット「LGBTQ+支援の専門家が語る学校体育の現状と未来」(2024)として作成、配布した(資料2)。また、その結果のうち、「LGBTQ+が学校体育(授業・行事・部活動)で直面する困難」を資料3～資料5のとおり、4要素にまとめた。

資料1. 飛騨シュレ紹介(一部)



資料2. 「LGBTQ+支援の専門家が語る学校体育の現状と未来」表紙



資料3. 学校体育はジェンダー・セクシュアリティの古い規範が強固

(1) 男女別、性別二元制が強固

体育授業や行事、運動部活動は男女で分けられることが多く、性によって異なるルールや服装などが適用されている。この傾向は中学校から一層強まるため、困難に直面し、体育嫌いや体育を避ける当事者が多くなっている。大学においても、同様の問題が見られる。

(3) シスジェンダー・ヘテロセクシュアル規範

保健の教科書に異性愛規範が記載されるなど、保健体育の学習によって、シスジェンダー・ヘテロセクシュアル規範が増強されているという懸念がある。このために、保健体育がはじめのきっかけを生み出したり、公然としたいじめの場になることがある。

(2) ジェンダー規範、特に男らしさ規範が根強い

体育授業の内容が競争的な近代スポーツを中心に構成されているため、「スポーツができるイコール男らしい」という価値観が根強く、男性優位が発揮されやすい場になっている。LGBTQ+当事者は、この価値観に伴って生じる容姿や言動へのからかいなどによる屈辱的な経験を重ねている。

(4) 教員の意識や対応の問題

これまでの調査で、教員が加害者的な存在になっている場合があることが明らかになっている。シスジェンダー・ヘテロセクシュアルの強い規範を持つ指導者も多く、それに基づいた発言に生徒たちが同調する場合もある。また、ジェンダー・セクシュアリティについての研修や性教育に関わる教育に消極的な場合も見られる。

資料4. 体育はLGBTQ+の生きづらさが凝縮する場

(1) LGBTQ+の困難やニーズは個々で異なっている

LGBTQ+は、性自認や性的指向のマイノリティの総称であり、当事者が直面する困難は多様であり、ニーズも個人によって異なる。カミングアウトしている人もいれば、クローゼットにいる人もいる。特にトランスジェンダーの場合、ノンバイナリーも含め、ありのままにいたいと思う人、ホルモン治療や適合手術（成人後）の過程のどこにいるかによって多様である。

(3) トランスジェンダーの苦悩

トランスジェンダーの当事者は、性自認と身体のギャップに耐え難い違和感を抱いている場合がある。個人によって身体治療の過程が異なるため、多様な状態があり、胸が膨らむなど外的な変化が起こることや流動的であることにも留意が必要である。このために、水泳など身体や体形をあらわにする場や服装を避けたいという切実なニーズがある。

(2) クローゼット（注2）の不安

小・中・高の学校期の場合、自覚が明確でないこともあり、強い不安を持ちながらも、周囲にカミングアウトできる状態にないことが多いと推測できる。その中で、当事者は周囲に悟られないように振る舞い、男女別のルールに戸惑い、体育では特に身体接触や身体を晒すことに強い不安を抱いている。

(4) LGBTQ+への対応がパターン化している

更衣やトイレ、運動着などについて、文部科学省などのガイドラインに沿ったパターン化された対応になっている場合が多い。保健室や「だれでもトイレ」を使用することがはじめのきっかけになる場合もある。また、更衣室やプールで身体を見ることが見られることに苦しさを覚える場合も少なくない。LGBTQ+への対応は、体育の古い規範を見直し、個別のニーズを聞き取ることから始まる。

資料5. LGBTQ+の人権が守られていない

(1) 個人の尊厳が傷つけられる場になっている

シスジェンダー・ヘテロセクシュアル規範の強い体育の場は、LGBTQ+当事者が身体や言動をからかわれるなど耐えがたい屈辱を味わう場になっている。また、生活に不可欠な更衣やトイレなどの使用に不自由さがあるなど、個人の尊厳に関わる深刻な問題がある。

(3) 運動部活動でも男女が強調され、参加が困難

運動部活動や競技大会は、性別で組織されているために、トランスジェンダーの生徒は参加、出場を制限されることが一般的である。競技レベルが高くなるほど出場資格が厳格になり、クローゼットの生徒まであぶり出すような扱いが懸念される。

(2) 進路や学習権が保障されない

嫌な経験を通じて当事者が体育を忌避することは、体育での排除が学校からの排除につながる場合もある。水泳などの授業を受けられないことは学習権が守られていないことであり、さらに成績や進路に強く影響している。

(4) スポーツ権の侵害

「スポーツは全ての人の権利」であることが謳われながら、体育・スポーツからLGBTQ+の当事者を排除する構造になっている。一般向けのスポーツクラブなどでも、学校体育と同様の問題があり、生涯にわたってスポーツに親しむことが阻害されている。

(3) 新たな体育カリキュラムについての総合的検討と今後の展望

本研究者が継続的に行ってきた「体育嫌い」に関する研究では、実質上、体育学習の中心となっている競技スポーツに、性別二元制や異性愛主義、規範的な男らしさが埋め込まれており、それが「体育嫌い」の経験を形作っていることを明らかにしてきた。つまり、「体育嫌い」は個人のせいではなく、「政治的」に、つまり社会のしくみから生み出されており、学校・社会のしくみやスポーツなどの暗黙の規範が体育カリキュラムに色濃く反映されているために、否応なく「体育嫌い」にさせられてしまうということである。体育が必修の教科・科目であり続け、さらに「スポーツは全ての人の権利」と謳うスポーツ基本法が有効である限り、子どもたちのスポーツ権・学習権を守るために体育カリキュラムを見直す必要があるだろう。また、子どものスポーツの場がハイパフォーマンスを目指す競技スポーツやスポーツビジネスの草刈場となり、過剰に競争的になっていることにも注意が必要である。

包摂や共生、多様性など、さまざまな表現で語られる体育への変革は、今すぐにでも可能である。制度設計の段階から教育行政や学校の方針、現場に立つ指導者の意識や指導の実際など、多角的・多層的な対応が必要だが、改革の手がかりは多い。ここでは、次の諸点を実行することを提案したい。

- 多様性の視点をインターセクショナリティの視点からとらえる
- 競技だけでなく、より広いスポーツの価値を同等に扱う
- 技能だけでなく、さまざまな学びの側面を重視する
- 性別を際立たせるウェアや施設を改善する
- 幅広いスポーツの価値を学ぶ種目選択制を確実に実施する
- 教育の方向性やジェンダー・セクシュアリティに関わる指導者の研修を充実させる

研究成果を出版物にまとめ、『どうして「体育嫌い」なんだろうージェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』(大修館書店, 2025年2月)として刊行した(資料6).

資料6.『どうして「体育嫌い」なんだろうージェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』書影

注

注1: 性的マイノリティについて, LGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー)や Q(クィア)を含めた LGBTQ と称されることが多いが, 本研究では, より多様な性を生きている人々全体を総称することを尊重し, 「LGBTQ+」と表現した.



文献

- グッドマン, D. J. ; 出口真紀子監訳 (2017)『新のダイバーシティをめざして 特権に無自覚なマジョリティのための社会的公正教育』上智大学出版.
- 井谷恵子・井谷聡子・関めぐみ・三上純 (2024)『どうして「体育嫌い」なんだろうージェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』大修館書店.
- 井谷恵子・井谷聡子・関めぐみ・三上純 (2024)「LGBTQ+支援の専門家が語る学校体育の現状と未来」. <https://sites.google.com/view/pegp/報告書リーフレット他>.
- 三上純 (2024)「日本の身体リテラシーに関わる議論の課題」スポーツ教育学会シンポジウム
- 文部科学省 (2022)「性的マイノリティに関する施策」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinken/sankosiryoy/1415166_00004.htm.
- 日本スポーツ協会 (2023)「体育・スポーツにおける多様な性のあり方ガイドライン」日本スポーツ協会.
- 野口亜弥・三倉茜・折目真地 (2023)「LGBTQ+ユースの体育現場の経験に関するアンケート 第1版」プライドハウス東京. https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/ally_experiences.pdf.
- Whitehead M.: The concept of physical literacy. *European Journal of Physical Education*, 6(2): 127-138, 2001.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 vol.831
2. 論文標題 「沈黙する『体育嫌い』の声を聴く」研究が語るもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 月刊WeLearn	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 Vol.65-10
2. 論文標題 「体育嫌い」とスポーツの文法	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三上純	4. 巻 23-2
2. 論文標題 身体リテラシーをめぐる議論はいかに Margaret Whitehead を回避するのか：日本スポーツ協会の報告書に焦点化して	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 子どもと発育発達	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 72-4
2. 論文標題 LGBTQ+はなぜ「体育嫌い」になるのか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井谷恵子	4. 巻 23
2. 論文標題 学校体育におけるトランスジェンダーの児童・生徒の困難と求められる対策	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 スポーツとジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井谷恵子・三上純・井谷聡子
2. 発表標題 ジェンダー分析による体育カリキュラム 変革の可能性ー：フォーカス・グループ・インタビューによる「体育嫌い」の研究を通して
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会 (同志社大学 2023.8.30)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井谷恵子
2. 発表標題 誰一人置き去りにしない体育を目指して：体育はLGBTQ+が困難を抱えやすい場
3. 学会等名 日本体育科教育学会第29回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 井谷恵子
2. 発表標題 学校体育におけるトランスジェンダーの児童・生徒の困難と求められる対策
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会第23回大会 (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 三上純
2. 発表標題 日本の身体リテラシーに関わる議論の課題
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第44回学会大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 井谷恵子・井谷聡子・関めぐみ・三上純	4. 発行年 2025年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 どうして「体育嫌い」なんだろうージェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>体育・スポーツのジェンダー・セクシュアリティの ポリティクス: 「誰も置き去りにしない体育」をめざして https://sites.google.com/view/pegp/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井谷 聡子 (Itani Satoko) (30768263)	関西大学・文学部・准教授 (34416)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関 めぐみ (Seki Megumi) (20793045)	甲南大学・文学部・講師 (34506)	
研究分担者	三上 純 (Mikami Jun) (10993826)	大阪大学・大学院人間科学研究科・助教 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関